

坂口やの疣地蔵

その昔、この土地でとれる白目石を掘って生計を営む一人の石工がおったそうです。ある日のこと、いつものように石を掘っていると、中からひよっこり一体のお地蔵様が顔を出したではありませんか。

「あれれっ、こりやなんだんべや？」

石工は腰をぬかすほど、びっくり仰天してしまいました。

「こりやあ何かありがたい、ご利益のあるお地蔵様ではあんめいかな。」

と首を傾げるばかりでした。石工は、そのお地蔵様を龍門寺（真言宗）がある山の中の洞窟に安置しました。

「やれやれ、これでよし。お



疣地蔵様

地蔵様も喜んでくれてっぺか。」

ほっと胸をなでおろしました。

ところで、この石工は、長いこと体中に疣ができていて、悩んでいましたが、それ以来、少しずつ治りはじめてきたことに気がづきました。

「どうしたこったんべ？ 医者にもかかんねえのに疣が治っちゃうのか。」  
と、不思議に思いました。それから何日か立つうちに、疣はすっかり治ってしまいました。家族のものは、

「疣が治ったのは、あのお地蔵様のおかげではあんめか。」  
と思うようになったのです。やがて、その話は村中に知れ渡り、いつしか、

「あのお地蔵様は、疣にご利益があんだそうだと評判になりました。」

ある時のこと、疣で悩んでいる一人の村人が、お地蔵様の前を通りかかりました。

「何でこんなところに疣ができんだんべや。なあ、お地蔵様や。」

ひとり言をいいながらお地蔵様の頭を手でなでてみました。お地蔵様はにこにこ顔で、村人を迎えてくれました。

その村人は家に帰り、お地蔵様をお願いしたことを思い出しながら、

「本当に、あのお地蔵様はご利益があんだんべか。」

不安な気持ちでいっぱいでした。

次の朝のことです。その村人の体中にできていた疣が、何とあとかたもなく治っていることに気がつき驚いてしまいました。

「あれ！疣がねぐなつてしまったぞ。もしかして、あのお地蔵様のおかげじゃあんめかな？ 何とありがてえお地蔵様だ。」

と喜びました。石工は、さっそく村中の同じ病で悩んでいる人々に、このお地蔵様のご利益を知らせてまわりました。

その後、今度は、痔で悩んでいる人がおり、お地蔵様をお願いしたところ頑固な痔もたちどころに治つてしまったということでした。

この話は瞬く間に近隣に広まり、多くの人々がお参りに来て願をかけるようになったということ。それ以来人々から坂の降り口の所にあるこのお地蔵様を『坂口やの疣地蔵』と呼び親しまれ、頼りにされたそうです。

今ではこのお地蔵様は、高速道路の建設により、中里西組の山際に移されており、時折お参りの人がおとずれているそうです。

「おかげさまで、疣が治りました。」

再びお礼参りにこられる方もあります。近郊の村人も、

「本当に、医者でもなかなか治らねえのに、どうしたこつたんべ。何とも不思議でな

んねえや。」

首をかしげながら、これからもずっとこのお地蔵様を大切に守っていきたいものだときさやいていました。

ところで、このお地蔵様には、こんな話も語伝えられています。明治初期のころでしようか。中里の地に炭焼きを営むお爺さんがおりました。お爺さんは毎日山から木を切り取り、たくさんの炭をつくっていたのです。

ある日のこと、お爺さんは、龍門寺の近くの山の中の洞窟の前まで来て、ふと立ち止まりました。洞窟を覗き込みキョロキョロと見回し、天井の岩に目をとめました。そして、ポンと手をたたきながら、

「ややっ、この天井の岩は、炭焼き釜の扉にピツタンコだんべや。」

と独り言をいいながら、その岩をはがし取ることにしました。何日かかかって、やっ

天井の岩をうまくはがし取ることができました。大きな岩は、「ズシーン」と地響きをたて崩れ落ちました。その時のことです。岩の一部がお地蔵様の鼻に当たり、鼻が削りとられてしまったのです。その傷跡は今でも、いたいたしくはつきりと残っているのです。

お爺さんはその岩を荷車に載せ、炭焼き小屋まで運んで扉として使ってしまったのでした。それから幾日かたち、このことを知った龍門寺のお坊さんは、

「とんでもねえことをしてかしてくれたもんだなや。何かたたりでもねえけりやええが

のう。」

怒りや心配やらで夜も眠れないほどだったそうです。

ある時、せつせと作った炭がたくさんたまったので、お爺さんは、炭を馬車に積み、氏家の方に売りに行きました。馬車が氏家の東北本線の踏み切りにさしかかった時のことです。突然馬が踏み切りの真途中で止まってしまいました。お爺さんは、ひどく困ってしまい、

「こりや、駒や、何やってんだ。もたもたしてると汽車がきつちまうぞ。」  
馬の背に鞭打ちながら大声をあげて馬車を動かそうとしましたが、馬は立ち止まったまま何としても動かうとせませんでした。まもなく、遠くから、

「ボーツ。ボーツ。」  
汽笛が聞こえ、見る見るうちに汽車が踏み切りに近づいていきました。お爺さんは血相をかえ、

「こんちくししよう！ 何で動かねんだ！ 汽車にひかれちまうぞ！」  
と、必死に馬をせき立てましたが、それでも馬は動かうとせませんでした。

汽車はけたたましい汽笛を鳴らしながら、馬車もろともお爺さんを吹き飛ばしてしまいました。それは、あつという間のできごとでした。

数日後、このことを知った龍門寺のお坊さんは、

「それ、いったこつちやねえ。わしや、何かたたりがねえければいいがと思つたところじゃ。あん時、わしが岩を返させればえがったんだが、気がまわんねかった。申しわけねえこととしてしまったもんだ。かんべんしてくれや。」

と、そつと仏様に向かい、手を合わせたのでした。

その後、炭焼き釜に使った岩は、どこに埋もれてしまったのか知る人は誰もいません。また、龍門寺もあとかたもなく姿を消し、誰一人としてそのことを語る人はいなくなりました。

ただ、お地蔵様だけが今でもひっそりと世の中を見つめているのです。